

## 炭都が燃えた

山門郡大和町 平田 巽

晴れ渡った大空に、今日もジェット旅客機が飛び去って行く。多くの旅人を乗せてどこへ行くのであろうか。平和な日本の大空に今は恐れるものは何もない。だが50年の昔、太平洋戦争中米軍の爆撃機がこの空を飛び回り、焼夷弾の雨を降らせて日本全土を焼きつくした。石炭と工業の街大牟田も、例外ではなかった。

周囲を工場にかこまれた大牟田の街は、化学工場から吐き出す白煙と、夕立雲にも似たどす黒い煤煙が立ち上り、煙と埃に包まれた暗い街である。街の中心を流れる川の水も、化学薬品の廃液と、油の混じった七色の汚水が流れ、川辺に漂う悪臭は喉をさし、頭痛を起こして目まいさえ引き起こした。この川を街の人は悪水川と呼んでいた。昔の人は、この汚水を公害と呼ぶ人は一人もいなかった。炭鉱と化学工場に閉ざされて永年住みなれた市民は、これがこの街特有のものだと信じ込み、諦めていたのだろう。

最も戦時中は、軍部の圧力により国民の不平不満など一切認められず、戦時協力一途に強制的に没頭させられた。石炭採掘により今日まで日本経済を支えてきた街、大牟田が焼けたのは、昭和19年に始まり終戦直前まで5回にわたり被爆した結果である。なかでも集中的に街の民家が広範囲に焼き払われたのは、20年6月18日と7月27日の空爆によるものだった。

6月の爆撃では、爆撃機B29、116機（米軍資料）により海岸線が被爆した。しかし干満の差が激しい有明海沿岸の街に対して、深夜の攻撃目標に誤差があり、地上の損害は僅少に止まった。

その後、航空基地をマリアナに移した米軍の空爆は日増しに激化し、東京を中心に日本全都市への無差別爆撃が開始された。

米軍は、大牟田空襲の失敗を補うために、7月27日、124機によりやり直し空爆を敢行した。前回の失策を繰り返さぬように慎重を極め、大量の照明弾を投下して街じゅうを明るくし、焼夷弾の雨を降らせた。この空爆により大牟田の街は完全に焼け爛れ、街は実に悲惨なものとなった。片平町の延命公園内には陸軍の砲兵部隊が駐屯して空を護っているが、空を被るばかりの敵大編隊に対しては何の効果もなかった。

この空襲の夜、私は片平町の夜間中学から帰宅した直後であった。その当時、午前0時頃になると毎夜のごとく空襲警報のサイレンが夜空に鳴り響いた。その夜もサイレンの唸りを聞きながら机に向かっていた。だが、外の様子が変である。いつもと違っていた。我が家の上空を飛び去る爆撃機の爆音が激しく、その機数が多い。外は騒然となり、村人の叫び声が激しくきこえる。防空壕に避難を始めたらしい。

私は急いで外へ出てみた。近所の人々は壕の前に集まり、ガヤガヤ騒いでいる。月も星もない暗い夜、南の空が真っ赤である。時々ドドン、ドドンと爆発音が響く。だれかが「大牟田がやられた」と叫んだ。集まっていた村人は溜め息をついた。大牟田には肉親が多い街である。誰もが身内の安否を気遣ってのことだろう。海岸を隔てて現場から数km離れたここまで街の人々

の泣き叫び、火の海を逃げ惑う地獄の中の姿が目に見えるようである。真っ赤な炎が夜空に舞い上がった。焼夷弾の火が民家に燃え着いたのであろう。空には米軍の爆撃機が編隊を組み、ライトを点滅させながら勝ち誇った姿で堂々と飛び去って行く。もはや戦争は国外ではなく国内に移っていた。今では米軍の戦略どおり一方的な攻撃に代わり、身近に迫った戦争の恐怖と戦った。

これに対して、日本軍の反撃は微々たるものだった。物量と兵器で遙かに勝る米軍は、精神力だけの日本相手では赤子の手を捻るようなもので、すでに勝敗は決していた。それでも大本営の戦果発表はいつも敵機撃墜と、惨敗しながらも戦勝報道ばかりが流された。それを信じた国民は、一億国民総玉砕の大和魂を誓い合った。

空襲の翌日、工場へ出勤する満員電車の横を敵のグラマン戦闘機が2機、威嚇するかのよう悠々と低空して飛び去って行った。工場には、昨夜の空襲で焼け出された市内からの通勤者も出勤してきた。しかし、無口になっている。昨夜の空襲による恐怖の余韻が消え去ってはいないのだろう。

こんな哀れな状況の中でも命があれば休むことは許されない。我々が働く軍需工場は町はずれにあり、現場には憲兵が見回りにきて、欠勤者は徹底的に調査して罰された。

夕方、学校の下見に大牟田へ行った。市の中心を走る急行電車は栄町で止まり、終点へは通じていなかった。駅はまだ負傷者を運ぶ人で込んでいた。死傷者は数千とも伝えきくが、まだ確かなことは分からない。

駅のホームに降り立つと、コンクリート建築の松屋デパートと、市役所の建物だけが焼け残り、黒く煤こけ化け物のような姿で夕日の中に突っ立っている。街行く人の姿も疎らですれ違う人の服はちぎれ、素肌は黒く汚れて亡者の如く歩いて行く。我が家の焼け跡にただ呆然と佇む人、まだブスブス燻る焼け跡を掘り起こして瓦礫の中から肉親を捜す悲しい姿が目についた。母親に手を引かれ歩いて行く幼児は、空腹なのかやせ細り泣きながらついて行く。これからどこへ行くのか、行くあてもないだろう。

立ち並んでいた商店街も、線路沿いにあった民家も跡形もなく焼け尽くし、所々運よく難をのがれた民家が目だつ。電柱に絡んだ電線は、くもの巣のように纏れて垂れ下がり、道には焼夷弾の残骸が不気味に転がっていた。街じゅうには焦げくさい匂いが充満して、まるで生き地獄の中に行く思いがする。母校も一棟残して焼け落ちていた。真夏の夕日は情容赦なく照りつけ、焼け爛れた焦土に反射してこげつくほどの暑さである。

帰りの道は薄暗くなってきた。焼け残りの赤い火が薄気味悪い。電車の中は、田舎の知人を頼りに疎開して行く人でこんでいる。顔じゅう包帯にくるまれた痛々しい負傷者は、男女の区別さえ分からない。

空爆はこれだけに止まらず、終戦直前の8月7日正午、銀翼を連ねて飛来した米軍の爆撃機大編隊による爆弾攻撃を受けて多くの犠牲者が出た。

この日の攻撃目標は工場街だった。学徒動員で工場に就労していた中学生36名は哀れにもバラバラの遺体となった。まだあどけなさの残る可憐なこの子らの中には、女子生徒5名も含まれていた。